

# 浸水想定区域図データ電子化用ツール 操作マニュアル

平成 18 年 9 月

国土交通省 河川局

# 目次

<b>1. 機能の説明</b> .....	<b>1</b>
1.1 電子化用ツールの目的と機能 .....	1
1.1.1 目的 .....	1
1.1.2 サポートする機能 .....	1
1.2 作業フロー .....	2
1.2.1 最大包絡 .....	2
1.2.2 破堤点別 .....	2
1.3 電子化用ツールのセットアップ .....	3
1.4 電子化用ツールのフォルダ構成 .....	5
1.5 初期起動画面 .....	7
1.6 ヘルプ画面 .....	8
1.7 水理解析業務からの取込処理 .....	9
1.7.1 水理解析業務データ作成ガイドライン（案）に則っていないはん濫計算結果データ .....	9
1.7.2 水理解析業務データ作成ガイドライン（案）に則ったはん濫計算結果データ（参考：現時点では未実装） .....	13
1.8 対象フォルダの選択 .....	14
1.9 ファイルチェック .....	15
1.10 ビューワ表示 .....	16
1.10.1 破堤点別データの表示 .....	16
1.10.2 最大包絡 .....	17
1.11 コンター作成 .....	18
1.12 ファイル変換 .....	19
1.12.1 ファイル変換方法 .....	19
1.12.2 変換時の属性継承 .....	20
1.13 一括ファイル変換処理 .....	22
<b>2. 作業手順の例</b> .....	<b>23</b>
2.1 対象フォルダの選択 .....	23
2.2 ファイルチェック .....	24
2.3 ビューワ機能 .....	25
2.4 最大包絡のコンター作成 .....	26
2.5 データ変換 .....	27
2.6 一括データ変換 .....	28
<b>用語集</b> .....	<b>29</b>

## 1. 機能の説明

浸水想定区域図データ電子化ガイドライン（以下、電子化ガイドライン）では、浸水想定区域図の電子化を規定したものであり、浸水想定区域図データ電子化用ツール（以下、電子化用ツール）は電子化ガイドラインで規定したデータフォーマットでデータを作成するための支援ツールである。

浸水想定区域図データ電子化用ツール操作マニュアル（本マニュアル）は、電子化用ツールの利用方法を示したマニュアルであり、電子化用ツールが具備する機能に関して、それぞれ説明し、サンプルデータを用いたオペレーション例を記した。

### 1.1 電子化用ツールの目的と機能

#### 1.1.1 目的

電子化用ツールは、電子化ガイドラインで規定するデータフォーマットで浸水想定区域図の CSV・GIS・CAD データを作成する際の作業を支援することを目的としている。

#### 1.1.2 サポートする機能

電子化用ツールのサポートする機能としては、以下の項目が挙げられる。

- 「水理解析業務データ作成ガイドライン（案）」で作成された計算結果データから必要データを抽出し、ガイドラインで規定したデータフォーマットで CSV データを自動で作成する。また、それ以外のデータについても入力補助用 Excel ファイルを用いて、CSV データを作成することができる。
- 作成した CSV データのフォーマットチェックを行う。
- 最大包絡の CSV メッシュデータから、CSV コンターデータを自動作成する。
- CSV データを GIS・CAD データに自動変換する。
- 複数の破堤点別の CSV データを一括で GIS・CAD データに変換する。

電子化用ツールでは最大包絡の GIS・CAD コンターデータを作成するが、ポリゴンデータの作成はサポートしていない。ポリゴンデータの作成に関しては、「浸水想定区域図作成マニュアル」や「中小河川浸水想定区域図作成の手引き」に従い、作成しなければならない。

## 1.2 作業フロー

### 1.2.1 最大包絡

最大包絡データは浸水想定区域図を作成する基礎データとなるものである。電子化用ツールを用いて図 1 の手順で作業を行い、GIS・CAD のコンターデータを作成する。

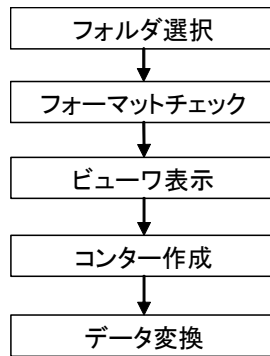


図 1 最大包絡の作業フロー

### 1.2.2 破堤点別

破堤点別の浸水深流速データは浸水想定区域図を作成するためのデータではないため、コンターの作成は行わず、メッシュデータの GIS・CAD データを作成する。電子化用ツールでは、フォーマットチェック・データ変換の処理を破堤点別フォルダ毎に行うため、データ変換を行った後、フォルダを再選択し、破堤点別フォルダの数だけ処理を行う。ただし、電子化用ツールには、複数の破堤点別フォルダのデータ変換を一括で行う一括変換機能が具備されているので、まとめてすべての破堤点別フォルダの浸水深流速データを変換することも可能である。

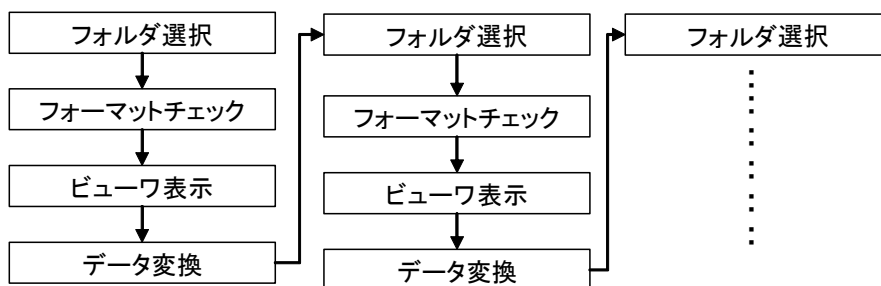


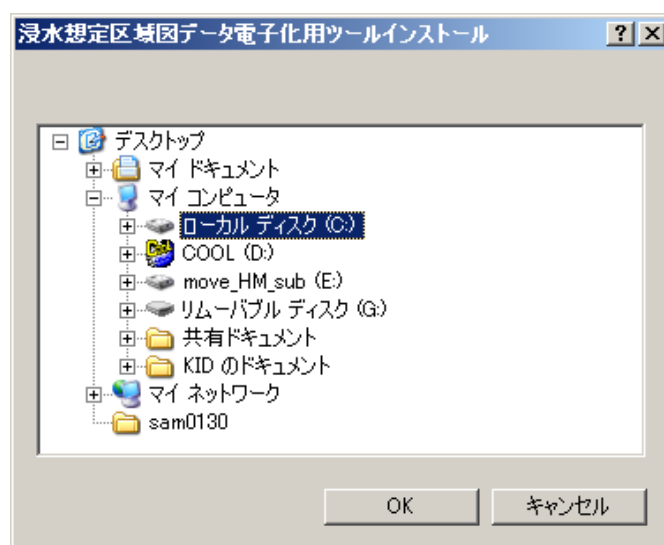
図 2 破堤点別の作業フロー

### 1.3 電子化用ツールのセットアップ

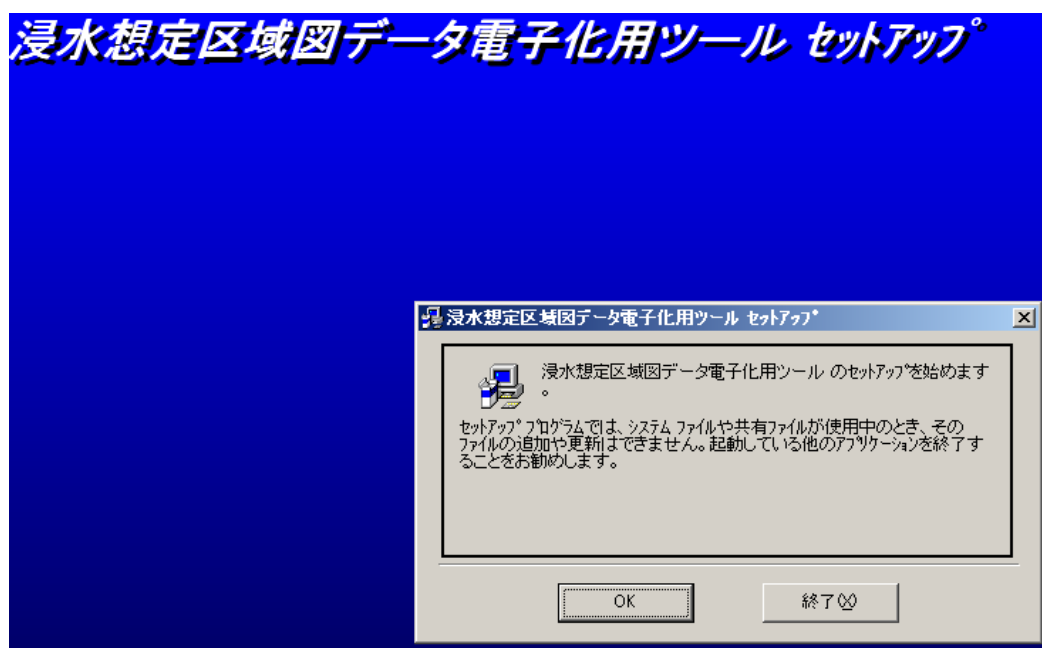
ここでは、電子化用ツールのセットアップ手順を説明する。

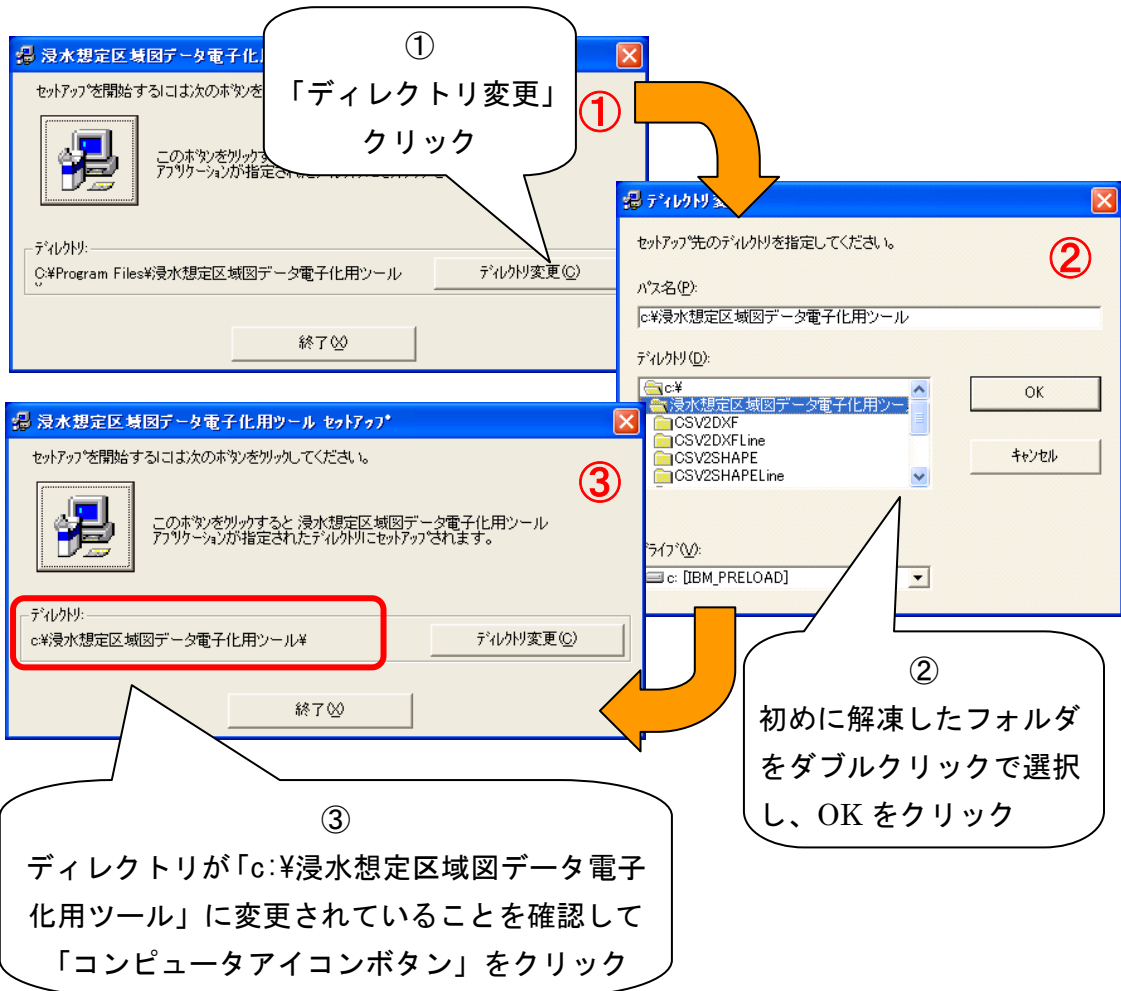
「浸水想定区域図データ電子化用ツールセットアップ.exe」をダブルクリックで実行すると、下図の画面が表示される。

解凍先のフォルダを選択する際、深い階層に解凍すると、解凍後のセットアップができなくなる可能性があるため、可能な限り浅い階層に解凍する。ここでは、Cドライブの直下に解凍した例を示す。

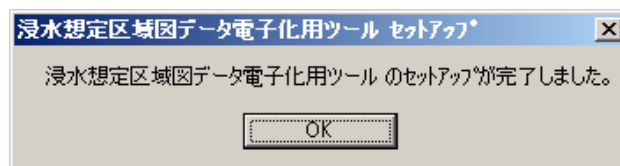


解凍先のフォルダを選択すると、下図のようにセットアップ画面が表示される。セットアップを開始する場合は、「OK」をクリックする。





- ① : 最初にディレクトリ変更ボタンをクリックし、「ディレクトリ変更」ウィンドウを表示させる。
- ② : 最初に解凍したフォルダをダブルクリックで選択して、「OK」をクリックする。
- ③ : ディレクトリの表示が変わったことを確認して、「コンピュータアイコンボタン」をクリックする。



セットアップが成功すると、上図が表示され、「OK」ボタンをクリックし、セットアップを終了する。

最初に解凍したフォルダに「浸水想定区域図データ電子化用ツール.exe」が生成されているので、これをダブルクリックし、電子化用ツールを立ち上げる。

また、[スタート]→[すべてのプログラム(P)]→[浸水想定区域図データ電子化用ツール]でもツールを立ち上げることができる

## 1.4 電子化用ツールのフォルダ構成

「浸水想定区域図データ電子化用ツールセットアップ.exe」によって生成される「浸水想定区域図データ電子化用ツール」のフォルダ構成は下図の通りであり、表 1 でそれぞれの内容を説明する。

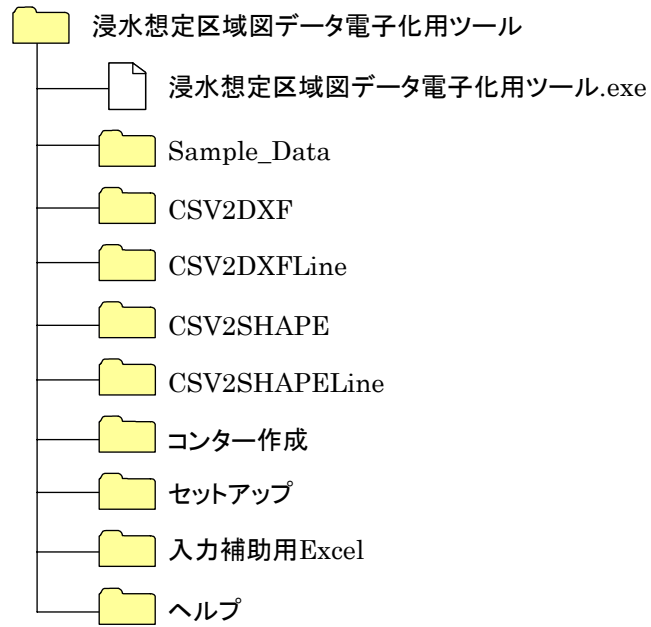


図 3 電子化用ツールのフォルダ構成

表 1 フォルダに格納されている内容

フォルダ名・ファイル名	説明
浸水想定区域図データ電子化用ツール.exe	電子化用ツールのインストールファイル
Sample_Data	サンプルデータが格納されている。
CSV2DXF	CSV メッシュデータを DXF ファイルに変換するプログラムが格納されている。
CSV2DXFLine	CSV コンターデータを DXF ファイルに変換するプログラムが格納されている。
CSV2SHAPE	CSV メッシュデータを DXF ファイルに変換するプログラムが格納されている。
CSV2SHAPELine	CSV コンターデータを DXF ファイルに変換するプログラムが格納されている。
コンター作成	CSV メッシュデータを CSV コンターデータに変換するプログラムが格納されている。
セットアップ	システムのセットアッププログラムが格納されている。
入力補助用 Excel	入力補助用 Excel ファイルが格納されている。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ METADATA.xls</li> <li>・ BREAK_POINT.xls</li> <li>・ BPnnn_XXXXXm.xls</li> </ul>
ヘルプ	システムで使用するヘルプデータ（テキスト、BMP 等）が格納されている。

## 1.5 初期起動画面

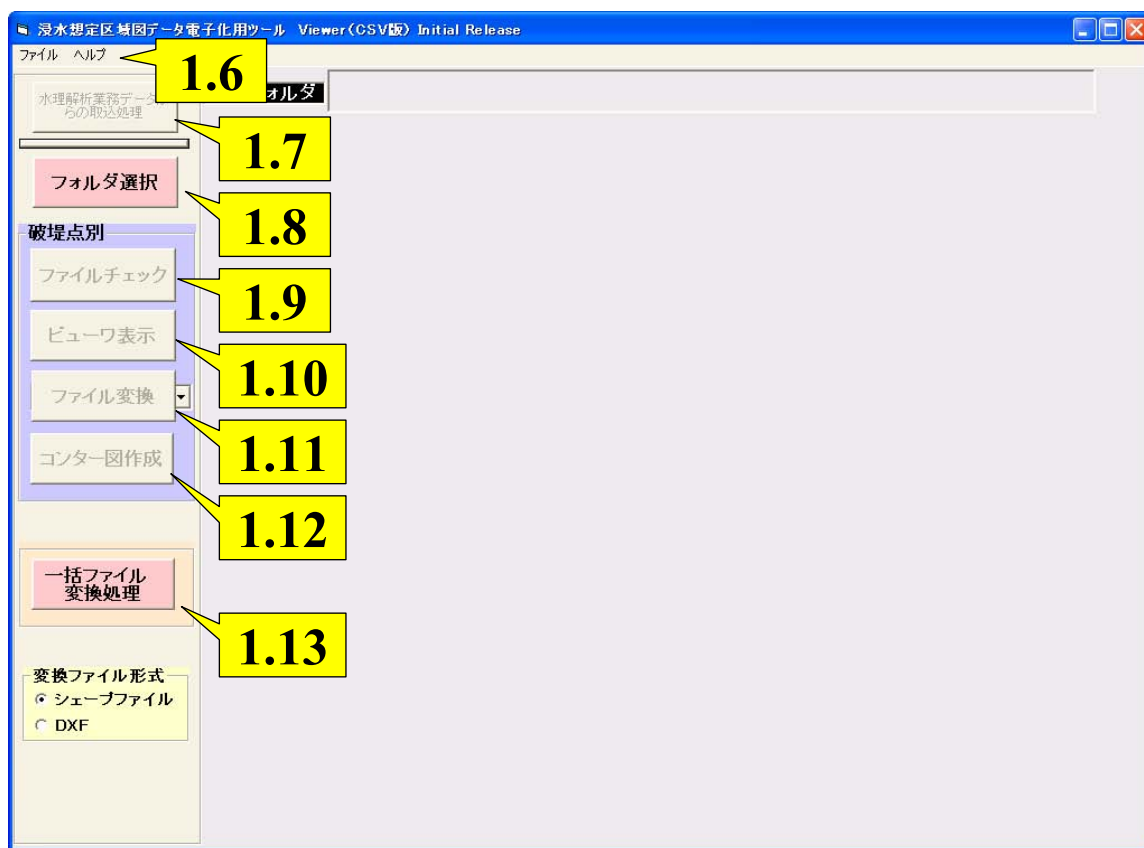


図 4 初期起動画面

図 4 は電子化用ツールを立ち上げると、初めに表示される初期画面である。  
噴出しの数字は、各コマンドボタンが持つ役割に関して本マニュアルで記述している章番号である。

## 1.6 ヘルプ画面

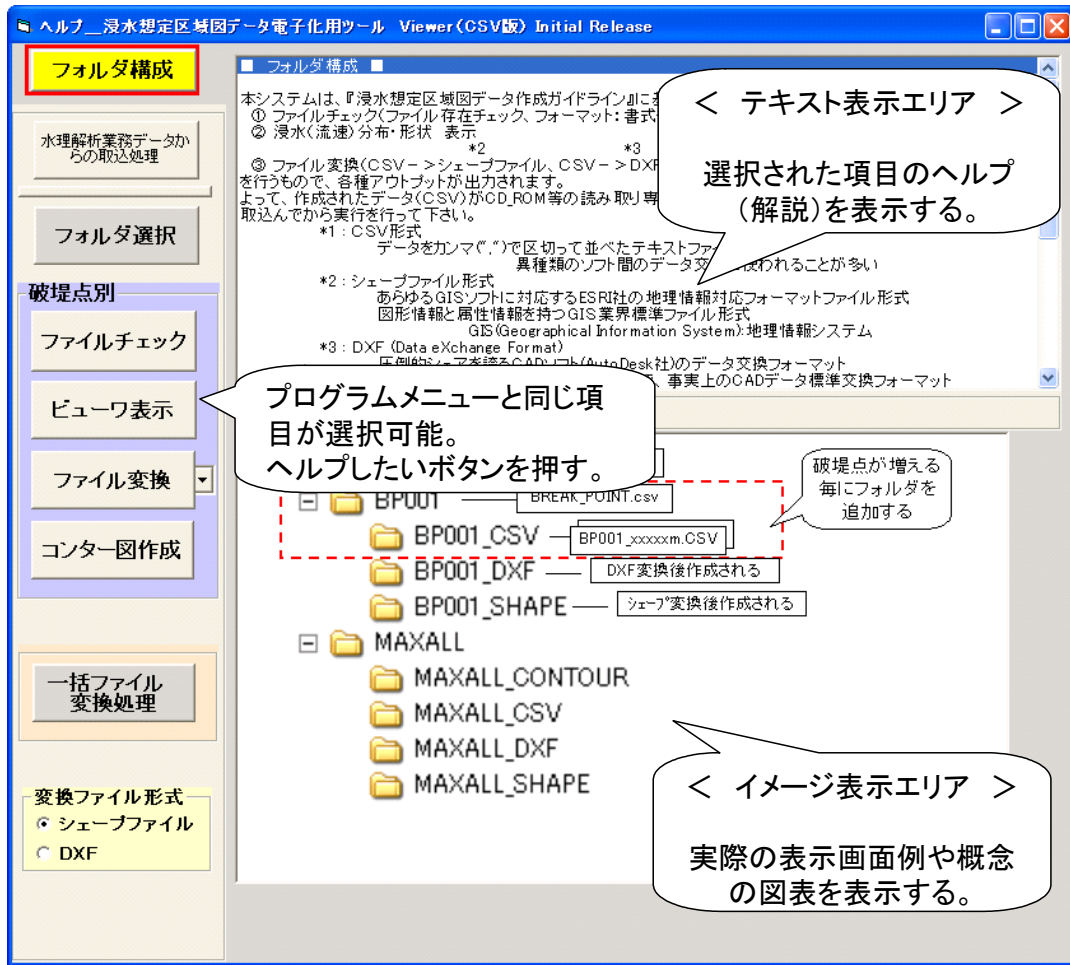


図 5 ヘルプ画面

ヘルプを参照したい項目のコマンドボタンをクリックすることにより、画面右側にヘルプ内容を参照させる。図 5 は「フォルダ構成」のヘルプ画面である。

画面右側上部の<テキスト表示エリア>にはテキストによるヘルプが、下部の<イメージ表示エリア>にはイメージによるヘルプが、それぞれ表示される。

## 1.7 水理解析業務からの取込処理

### 1.7.1 水理解析業務データ作成ガイドライン（案）に則っていないはん濫計算結果データ

支援ツールである入力補助用 Excel ファイルを用いて手作業による浸水想定区域図 CSV データを作成する。

入力補助用 Excel ファイルには次の 3 つのファイルがある。

- METADATA.xls : メタデータファイルの CSV ファイル作成
- BREAK\_POINT.xls : 破堤点定義ファイルの CSV ファイル作成
- BPnnn\_XXXXM.xls : 浸水深流速データファイルと最大包絡データファイルの CSV ファイル作成

### (1)メタデータファイルの作成

入力補助用 Excel ファイル『METADATA.xls』を開き、指示に従い数値や文字を入力していく。

1	2	3	4
区分	項目	入力	項目の説明
ファイル識別子	ファイル識別子	〇〇川上流氾濫解析	浸水想定区域図データのタイトル
識別情報	西側境界経度	139.125000	座標を経度緯度で単位は「度分」ではなく「度」、実数の数値のみ入力
識別情報	東側境界経度	140.000000	
識別情報	南側境界経度	35.583333	
識別情報	北側境界経度	36.333333	
フォルダ説明個数	フォルダ説明個数	11	
フォルダ説明	BP001	132Km右岸破堤	
フォルダ説明	BP002	132Km左岸Case1	破堤点別フォルダの内容説明を記入する 破堤点別フォルダ個数で設定した個数分繰り返す この場合は、「11」
フォルダ説明	BP003	132Km左岸Case2	
フォルダ説明	BP004	132Km左岸Case3	
フォルダ説明	BP005	132Km左岸Case3 盛土考慮	
フォルダ説明	BP006	132Km左岸Case3 地盤高考慮	
フォルダ説明	BP007	132Km左岸Case4	
フォルダ説明	BP008	132Km左岸Case5	
フォルダ説明	BP009	132Km左岸Case6	
フォルダ説明	BP010	132Km左岸Case7 盛土考慮	
フォルダ説明	BP011	132Km左岸Case7 地盤高考慮	
言語	言語	日本語	
文字集合	文字集合	Shift_JIS	利用する文字コード
識別情報	地理境界ボックス	JGD2000 / (B, L)	日本測地系2000 / (緯度, 経度)
識別情報	単位名称	メートル	例)メートル, キロメートル
識別情報	華語原子	TP	東京湾平均海面

図 6 METADATA.xls

入力後、データを保存するが、データの保存は下図のように行い、CSV形式で保存する。

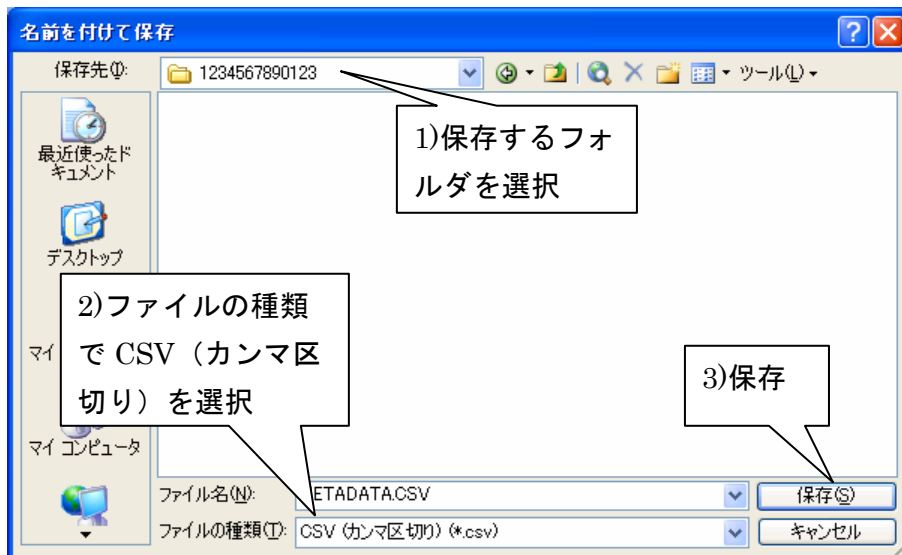


図 7 METADATA.CSV の保存

## (2)破堤点定義ファイルの作成

入力補助用 Excel ファイル『BREAK\_POINT.xls』を開き、指示に従い数値を入力していく。

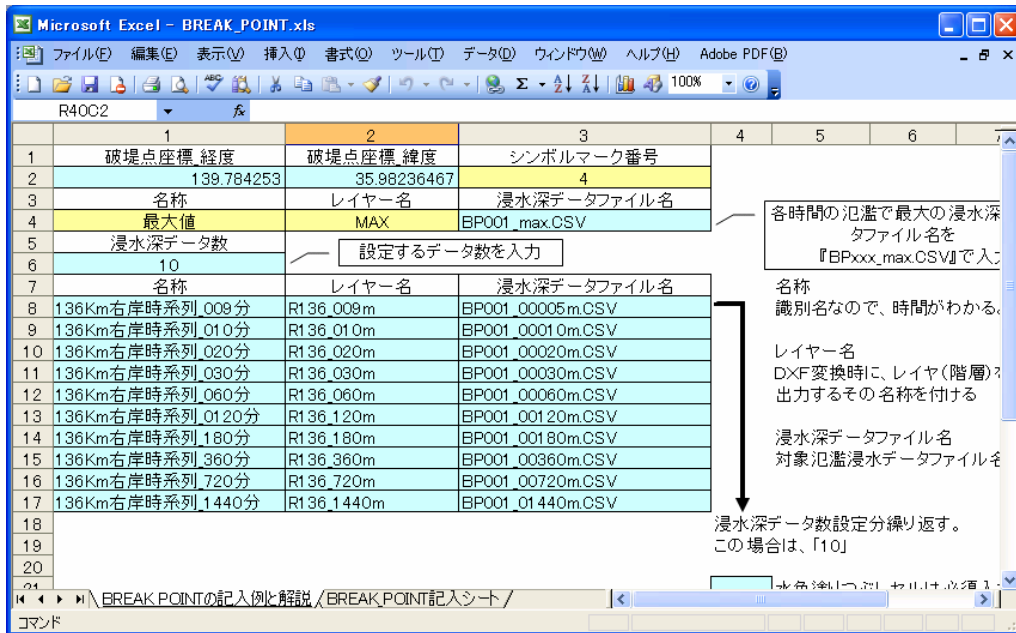


図 8 BREAK\_POINT.xls

入力後、データを保存するが、データの保存は下図のように行い、CSV形式で保存する。

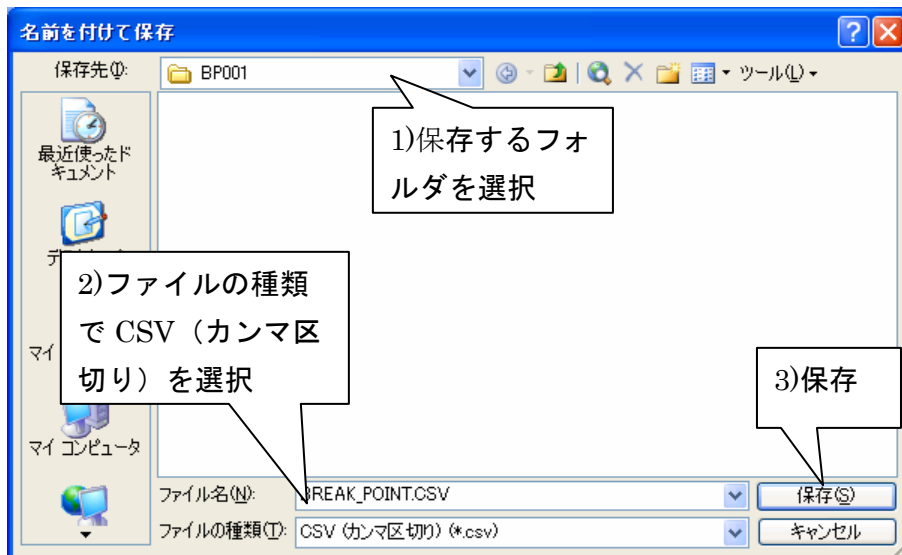


図 9 BREAK\_POINT.CSV の保存

### (3) 浸水深流速データファイルと最大包絡データファイルの作成

入力補助用 Excel ファイル『BPnnn\_XXXXXX.xls』を開き、入力項目に数値を入力していく。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1	浸水メッシュ数										
2	19										
3	メッシュコード	標高	浸水深	流速	P1経度	P1緯度	P2経度	P2緯度	P3経度	P3緯度	P4経度
4	543924093	12.35	0.279	0	139.6093	36.174	139.6155	36.174	139.6155	36.17817	139.6093
5	543924081	12.89	0.001	0	139.5968	36.16984	139.603	36.16984	139.603	36.174	139.5968
6	543924091	12.55	0.079	0.003	139.6093	36.16984	139.6155	36.16984	139.6155	36.17401	139.6093
7	543914984	11.78	0.633	0	139.603	36.16567	139.6093	36.16567	139.6093	36.16984	139.603
8	543915903	13	0.012	0.014	139.6218	36.16567	139.628	36.16567	139.628	36.16984	139.6218
9	543915923	11.36	0.647	0	139.6468	36.16567	139.653	36.16567	139.653	36.16984	139.6468
10	543915924	11.85	0.137	0.051	139.653	36.16567	139.6593	36.16567	139.6593	36.16984	139.653
11	543914971	11.93	0.026	0	139.5843	36.16151	139.5905	36.16151	139.5905	36.16567	139.5843
12	543914982	12.4	0.013	0	139.603	36.16151	139.6093	36.16151	139.6093	36.16567	139.603
13	543914991	12.07	0.247	0	139.6093	36.16151	139.6155	36.16151	139.6155	36.16567	139.6093
14	543914992	12.14	0.176	0.004	139.6155	36.16151	139.6218	36.16151	139.6218	36.16567	139.6155
15	543915921	11.93	0.915	0.098	139.778	35.98653	139.7843	35.98653	139.7843	35.9907	139.778
16	543915922	11.52	0.095	0.018	139.7843	35.98653	139.7905	35.98653	139.7905	35.9907	139.7843
17	543915931	11.24	0.231	0.159	139.778	35.98236	139.7843	35.98236	139.7843	35.98653	139.778
18	543915932	10.95	0.115	0.051	139.7843	35.98236	139.7905	35.98236	139.7905	35.98653	139.7843
19	543914873	12.13	0.032	0.027	139.7905	35.98236	139.7968	35.98236	139.7968	35.98653	139.7905
20	543914874	12.24	0.008	0.078	139.778	35.9782	139.7843	35.9782	139.7843	35.98236	139.778

図 10 BPnnn\_XXXXXX.xls

入力後、データを保存するが、データの保存は下図のように行い、CSV形式で保存する。

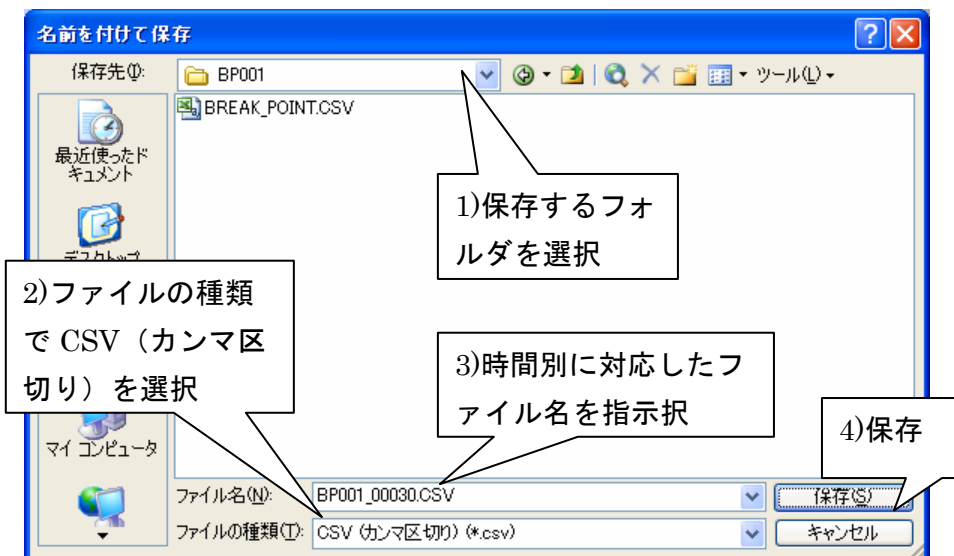


図 11 BPnnn\_XXXXXX.CSV の保存

ここで保存したファイル名と『BREAK\_POINT.CSV』で指示した浸水深流速データファイル名が同一となるように保存する。命名規則は電子化ガイドライン 2.2.2 命名規則で示した通りであり、最大包絡の CSV データを保存する場合は、ファイル名を『MAXALL.CSV』とし所定のフォルダに格納する。

### 1.7.2 水理解析業務データ作成ガイドライン（案）に則ったはん濫計算結果データ （参考：現時点では未実装）



図 12 水理解析業務データ作成ガイドラインで作成されたデータの取り込み

「水理解析業務データ作成ガイドライン（案）」で作成された氾濫計算結果データであれば、電子化用ツールを用いて自動で必要データを抽出し、電子化ガイドラインで規定している浸水想定区域図 CSV データを作成することができる。

ただし、現在、取り込み処理機能は未実装のため、使用することはできない。

## 1.8 対象フォルダの選択

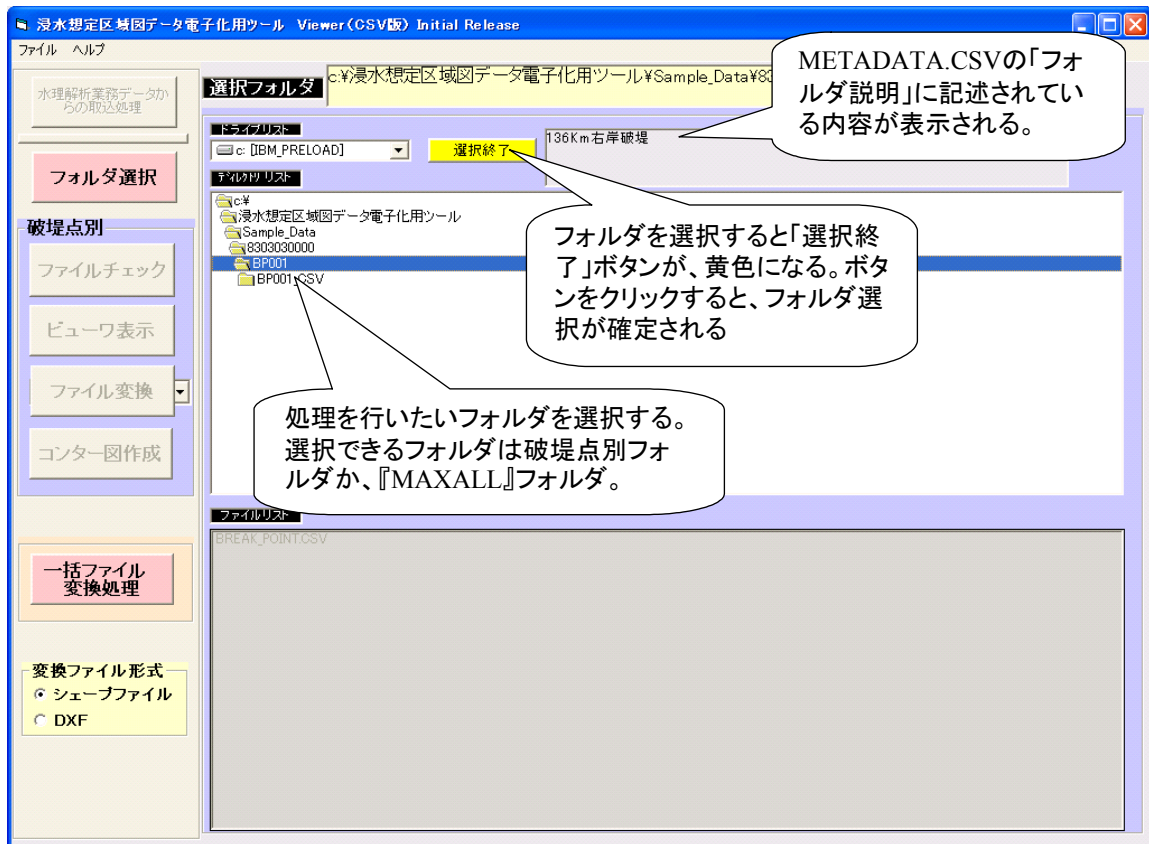


図 13 対象フォルダの選択

電子化用ツールを用いてファイルチェックや、データ変換を行う対象とするデータを定めるために、浸水想定区域図 CSV データが格納されているフォルダを選択する。選択したフォルダ内のデータに対し、ファイルチェックや、データ変換を行う。

選択対象フォルダは、『BP001』『BP002』などの破堤点別のフォルダと、最大包絡のデータが格納されている『MAXALL』である。

選択するフォルダをダブルクリックで指示すると、「選択終了」コマンドボタンの色が黄色に表示される。

「選択終了」ボタンをクリックすることにより、フォルダを確定させる。

## 1.9 ファイルチェック

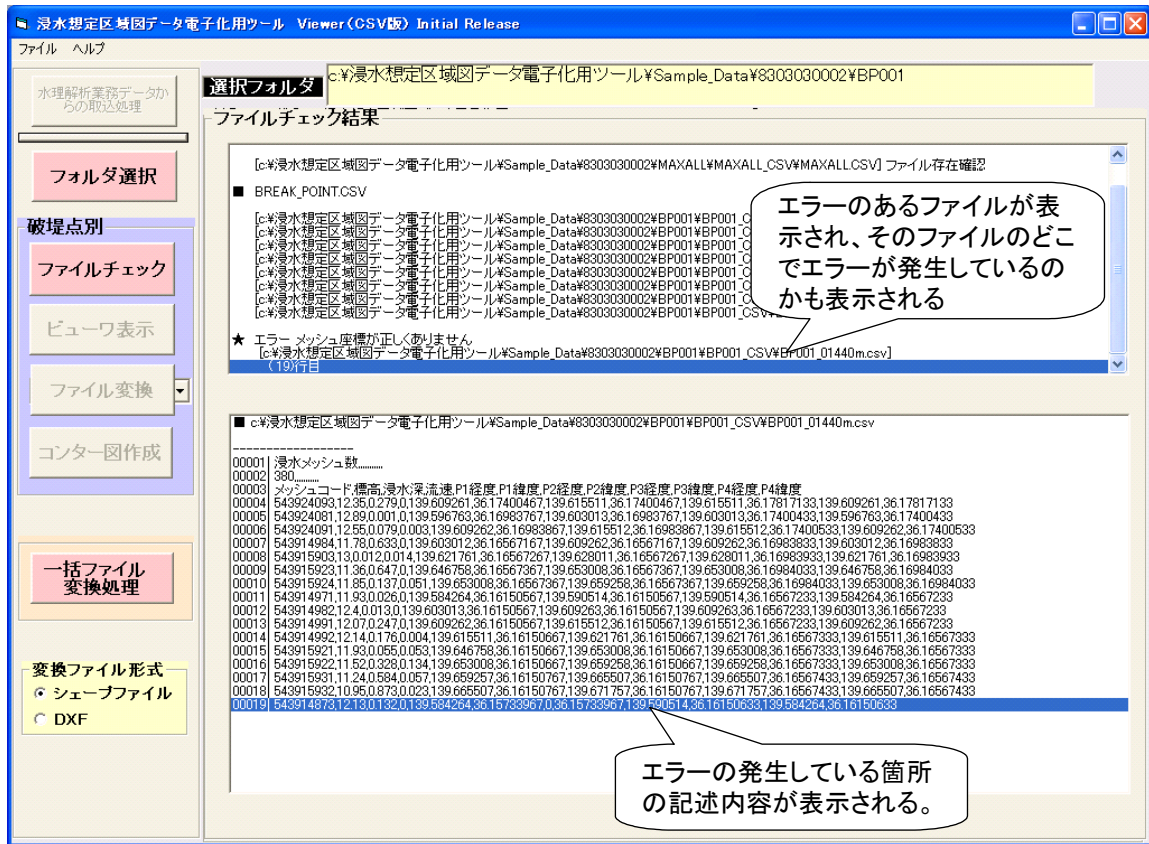


図 14 ファイルチェック

選択されたフォルダに格納されている浸水想定区域図 CSV データのフォーマットチェックを行う。

エラーが発生した場合は、その状況が画面上に表示される。エラー表示と同一内容がログファイル (ERROR.LOG) に記録される。

エラーがない場合は、以降のコマンドボタンが選択可能になる。

## 1.10 ビューワ表示

### 1.10.1 破堤点別データの表示

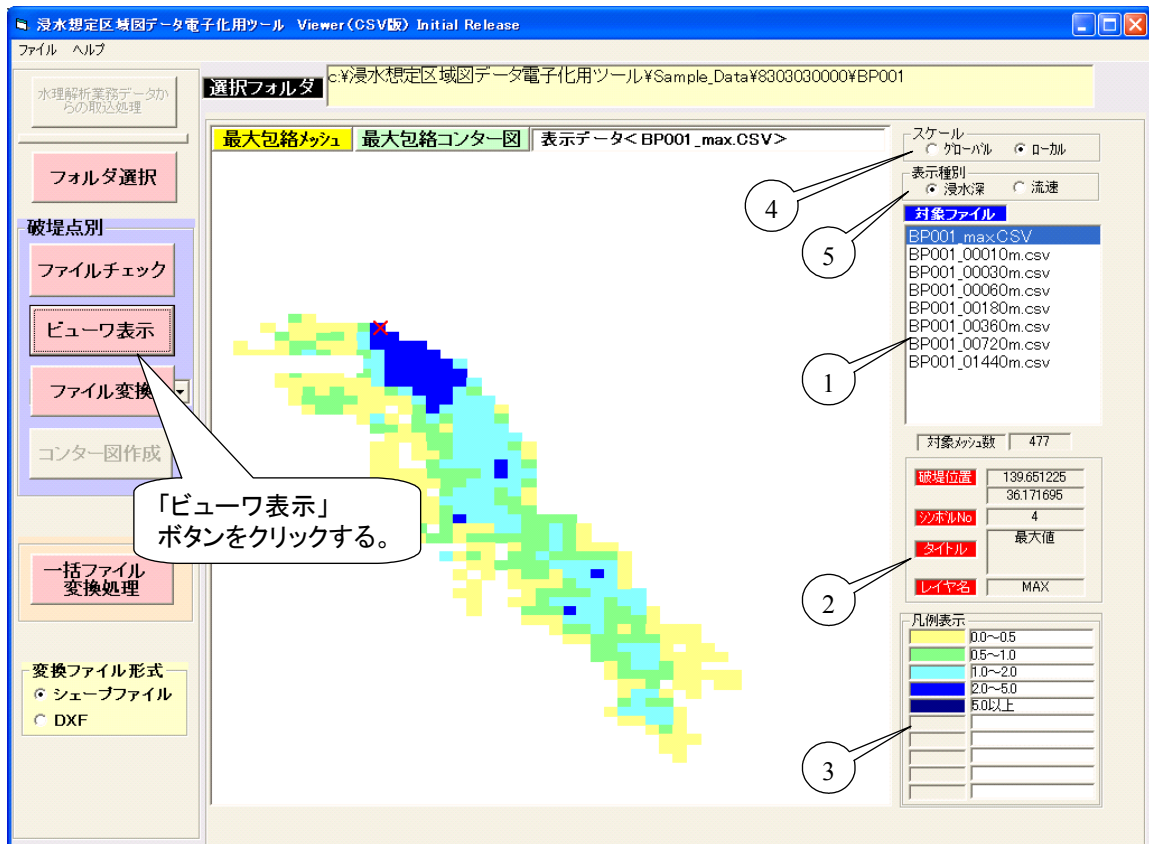


図 15 ビューワ表示

画面左の「ビューワ表示」ボタンをクリックすると、浸水想定区域図 CSV データのメッシュ図形が描画される。

- ①：表示させるファイルを選択することができる。
- ②：ファイルの概要が表示される。
- ③：凡例の内容が表示される。

凡例の色や範囲を変更したい場合は、以下の方法で変更することができる。

浸水深：浸水凡例属性.dat

流速：流速凡例属性.dat

上記ファイルは、本システムのルートフォルダ（プログラム本体が格納されているフォルダ）に存在する。必要であれば変更する。

- ④：スケールを変更することができる。  
グローバル：全破堤地点を対象とした縮尺で表示。  
ローカル：現在対象としている破堤点内での縮尺で表示。
- ⑤：画面表示を浸水深と流速で選択できる。

## 1.10.2 最大包絡

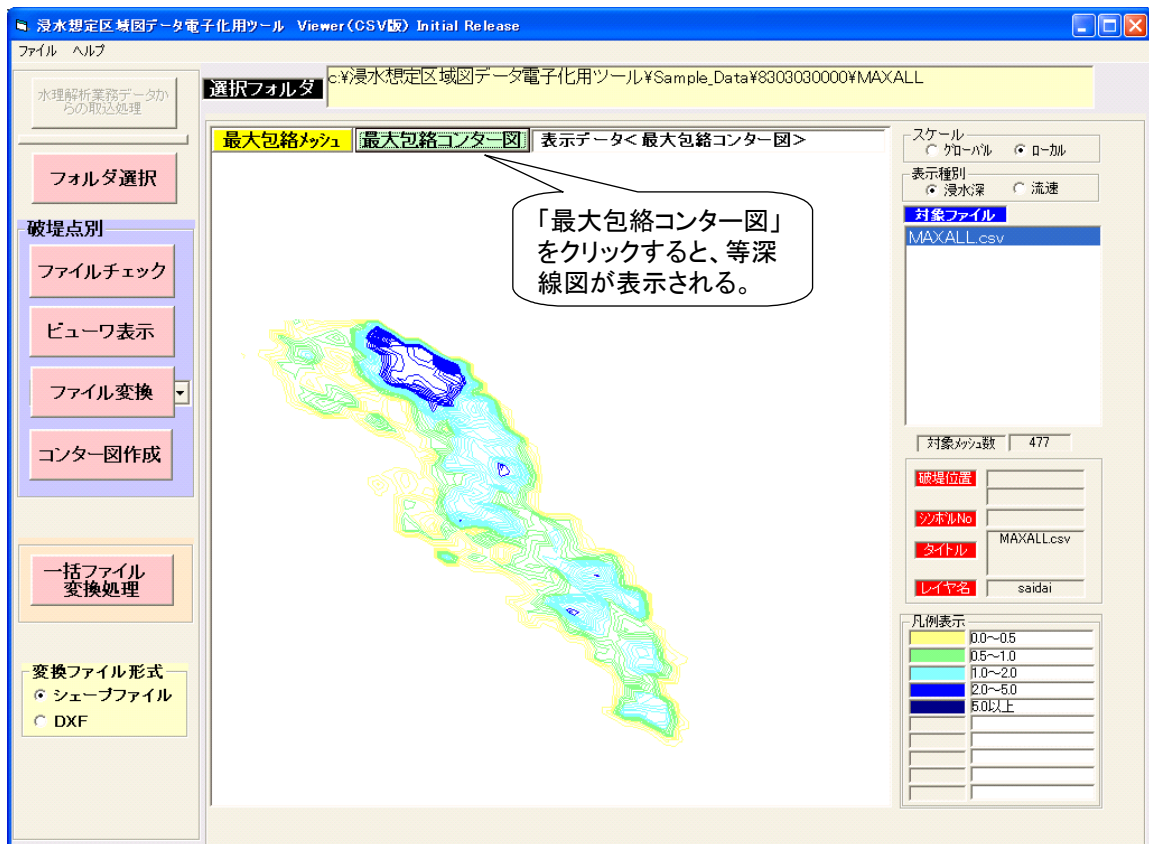


図 16 最大包絡のコンターの表示

最大包絡のメッシュ図形と、最大包絡のコンター図形を表示させることができる。ただし、最大包絡コンター図形を表示させるには、最大包絡の CSV コンターデータが作成 (1.11 コンター作成 参照) されている必要がある。

## 1.11 コンター作成

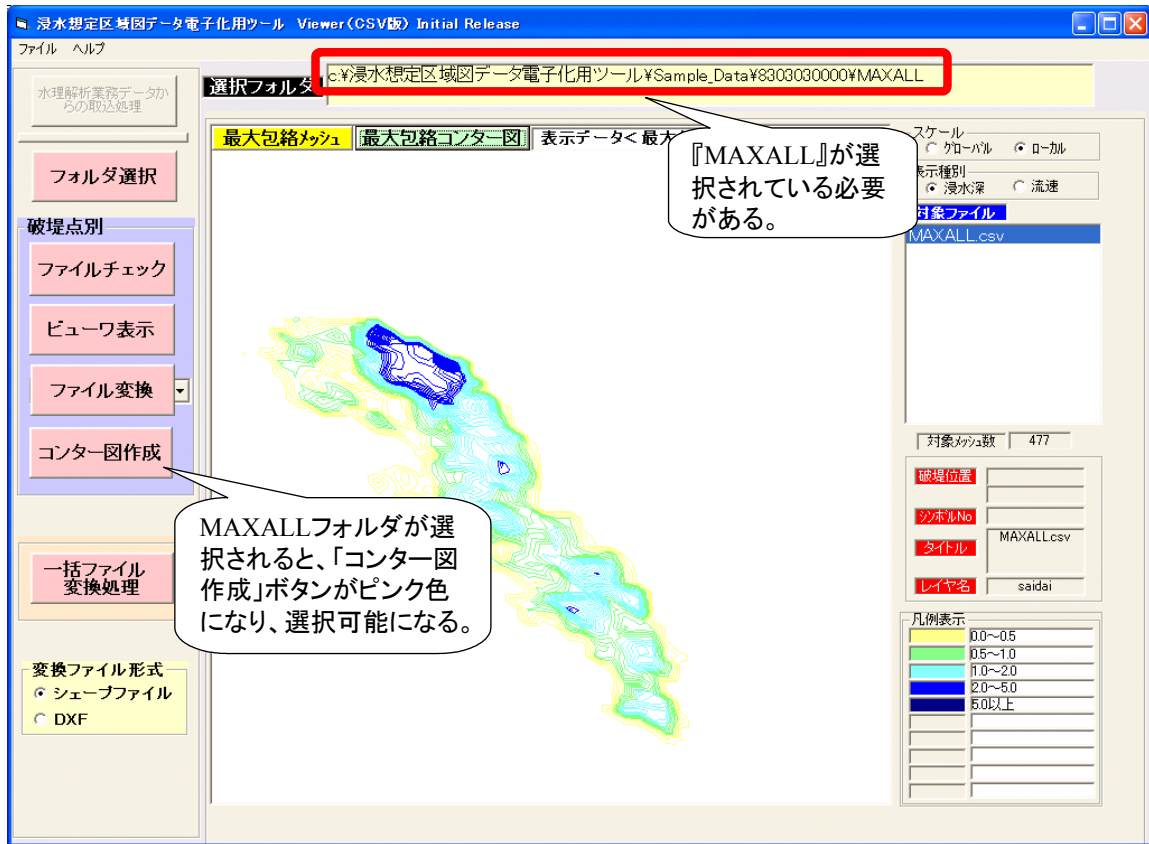


図 17 コンター作成

最大包絡の CSV コンターデータを作成する。コンターデータは最大包絡データの CSV データからのみ作成するので、選択フォルダが最大包絡のデータが格納されている『MAXALL』フォルダでなければならない。

『MAXALL¥MAXALL\_CSV』に、格納されている MAXALL.CSV からコンターを、0.1m ピッチで作成する。

変換ファイルは、下記フォルダが自動生成され、格納される。

『MAXALL¥MAXALL\_CONTOUR』に MAXALL\_CONTOUR.CSV が生成される。上記フォルダ内の MAXALL\_CONTOUR.CSV がコンターデータのファイルである。

## 1.12 ファイル変換

### 1.12.1 ファイル変換方法



浸水想定区域図 CSV データをシェープファイル、DXF ファイルに変換を行う。

最大包絡の CSV データをシェープファイル、DXF ファイルに変換する場合は、CSV コンターデータ (MAXALL\_CONTOUR.CSV) を変換することになるため、所定のフォルダに MAXALL\_CONTOUR.CSV が格納されていなければ、変換を行うことができない。

データ変換後、出力ファイルはそれぞれ以下のフォルダに格納される。

破堤点別の場合

シェープファイル変換 : 『BPnnn\_SHAPE』

DXF ファイル変換 : 『BPnnn\_DXF』

最大包絡の場合

シェープファイル変換 : 『MAXALL\_SHAPE』

DXF ファイル変換 : 『MAXALL\_DXF』

変換先のフォルダが存在しない場合は、自動的にフォルダが新規作成される。

### 1.12.2 変換時の属性継承

#### ■ シェープファイルの場合

- 破堤点別の場合

破堤点.shp : ポイントシェープファイル

BREAK\_POINT.CSV に設定されている破堤点座標、名称で作成される。

属性は、名称が取込まれる。

レイヤー名.shp : メッシュポリゴンシェープファイル

BREAK\_POINT.CSV に設定されているレイヤー名がファイル名で作成される。

浸水深流速データファイルで指示されている以下の内容が属性として取込まれる。

MESH、標高、浸水深、浸水ランク、浸水ランク .... 空項目

流速、流速ランク - 流速ランク .... 空項目

- 最大包絡フォルダの場合

MAXALL.shp : メッシュポリゴンシェープファイル

浸水深流速データファイルで指示されている以下の内容が属性として取込まれる。

MESH、標高、浸水深、浸水ランク、浸水ランク : 空項目

流速、流速ランク、流速ランク : 空項目

MAXALL\_CONTOUR.shp : コンター ポリラインシェープファイル

MAXALL\_CONTOUR.CSV コンタファイルからラインシェープを作成する。

コンターM - コンター高

#### ■ DXF ファイルの場合

- バージョンに関して

DXF には、現在バージョンが何種類か混在していますが、本システムでは下記理由から『R12 形式』(旧形式)で変換出力している。

- 古い CAD ソフトでも入力可能とし、最新 CAD ソフトでは上位互換があるので、R12 形式でも入力可能。
- R12 形式だと、新規図面でなくても挿入できる。(編集中心図面に挿入可能なので、使い勝手がよい)

- 変換時パラメータに関して

凡例定義ファイルに基づいて変換する。

- 破堤点フォルダの場合：『CSV2DXF』フォルダ内の浸水凡例『浸水凡例属性.dat』『流速凡例属性.dat』。
  - 最大包絡フォルダの場合：『CSV2DXFLine』フォルダ内の浸水凡例『浸水凡例属性.dat』『流速凡例属性.dat』。
  - 色番号は、使用する CAD の色番号を設定する。
- 変換ファイルに関して
    - 破堤点フォルダの場合  
レイヤー名.DXF：BREAK\_POINT.CSV に設定されているレイヤー名がファイル名として作成される。
    - 最大包絡フォルダの場合  
MAXALL.dxf
  - レイヤー（階層）設定に関して  
変換された DXF ファイル内には、以下のレイヤーが区分けされている。

hanrei_sinsui	:	浸水深凡例レイヤー
hanrei_ryusoku	:	流速凡例レイヤー
hatei	:	破堤地点レイヤー
sinsui_Map	:	浸水深分布レイヤー
ryusoku_Map	:	流速分布図レイヤー

## 1.13 一括ファイル変換処理

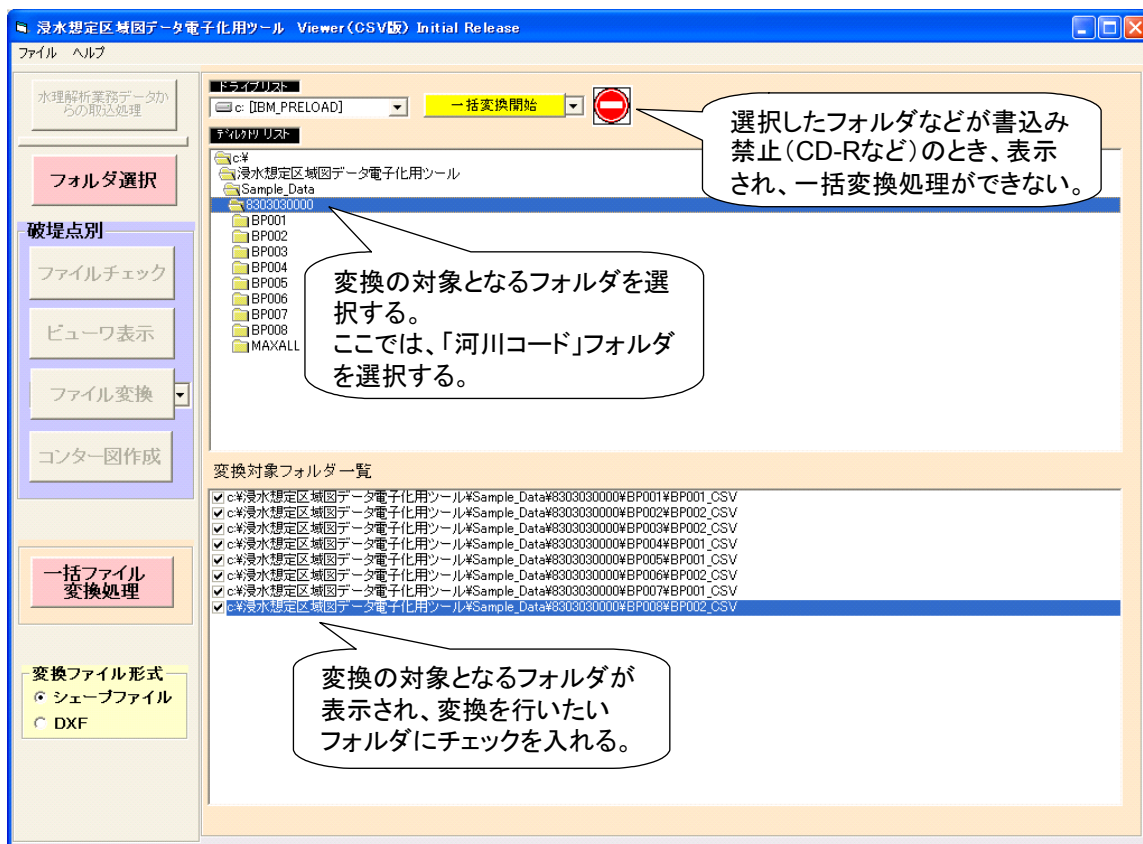


図 19 一括ファイル変換

河川コードフォルダに含まれている複数の破堤点別の CSV データを一括で、シェープファイル、DXF ファイルに変換を行う。なお、最大包絡『MAXALL』は一括変換の対象にはならない。

### ■ 選択方法

河川コードフォルダをダブルクリックで選択し、対象フォルダ一覧が画面下部に表示される。

一覧から、変換処理を行うフォルダにチェックを入れ、「一括変換開始」コマンドボタンの色が黄色になっていれば、ボタンをクリックし、一括処理を実行する。

※書き込み禁止フォルダの場合は、本処理は実行できない。

※ファイル変換格納場所や設定などは、破堤点別ファイル変換と同様。

## 2. 作業手順の例

ここでは、サンプルデータを用いたオペレーション例を示す。

### 2.1 対象フォルダの選択

ファイルチェック、データ変換を行う対象とするフォルダを選択する。



図 20 対象フォルダ選択の手順

- ① : 画面右側の「フォルダ選択」をクリックする。
- ② : ドライブを選択し、処理を行うフォルダをダブルクリックで選択する。
- ③ : 選択可能なフォルダが選択されれば、「選択終了」ボタンが黄色になり、クリックすることができる。  
「選択可能」ボタンをクリックすると、作業の対象とするフォルダが確定される。

## 2.2 ファイルチェック

作成した浸水想定区域図 CSV データのファイルチェックを行い、必要なファイルが正しい場所に格納されているか、電子化ガイドラインに沿ったデータフォーマットになっているかをチェックする。

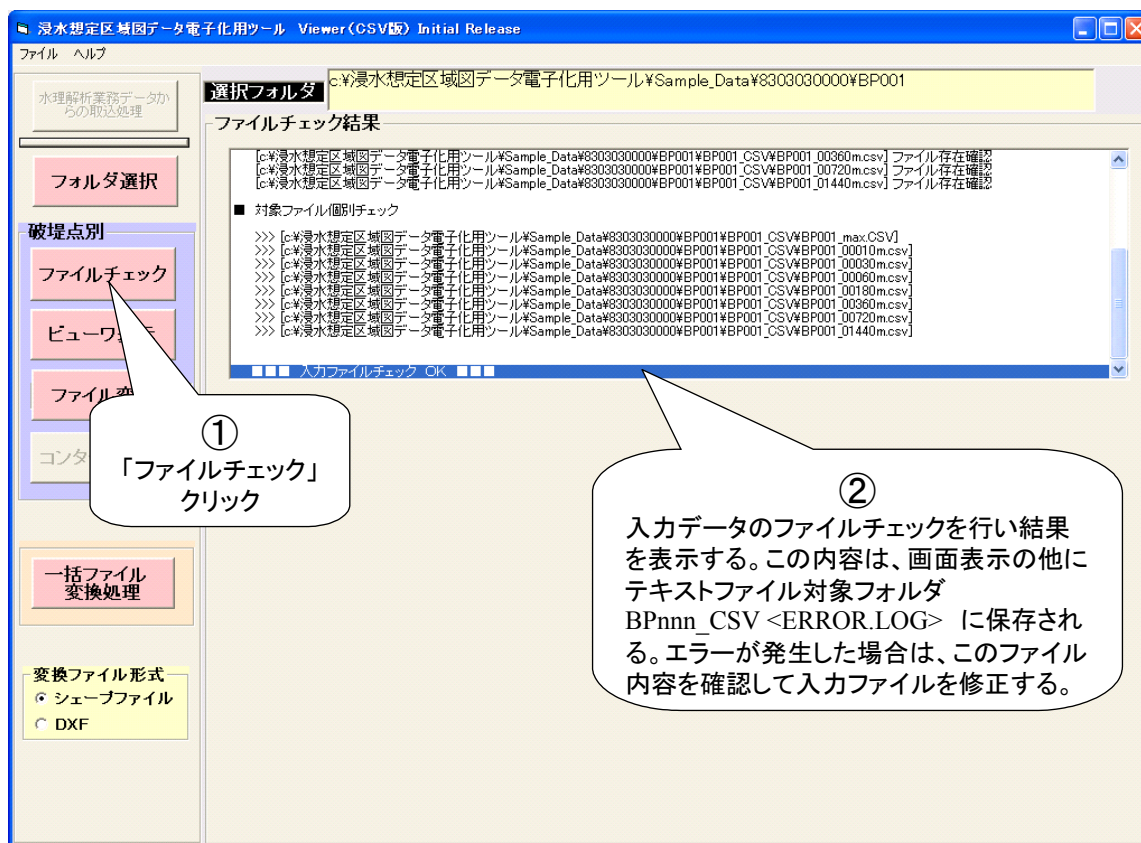


図 21 ファイルチェックの手順

- ① : 「ファイルチェック」ボタンをクリックし、ファイルチェックを行う。
- ② : ファイルチェック結果が表示され、エラーがあればどのファイルのどの行にエラーがあるのかが表示される。  
エラーがなければ、「エラーチェック OK」と表示される。  
チェック結果は、**ERROR.LOG** に保存され、このログファイルにファイルチェック通過のフラグが立っていないければ、データ変換を行うことはできない。

## 2.3 ビューワ機能

各 CSV データをメッシュ図として表示することができ、目視でファイルチェックを行うことができる。浸水深メッシュ分布図だけでなく、流速メッシュ分布図も表示することができる。

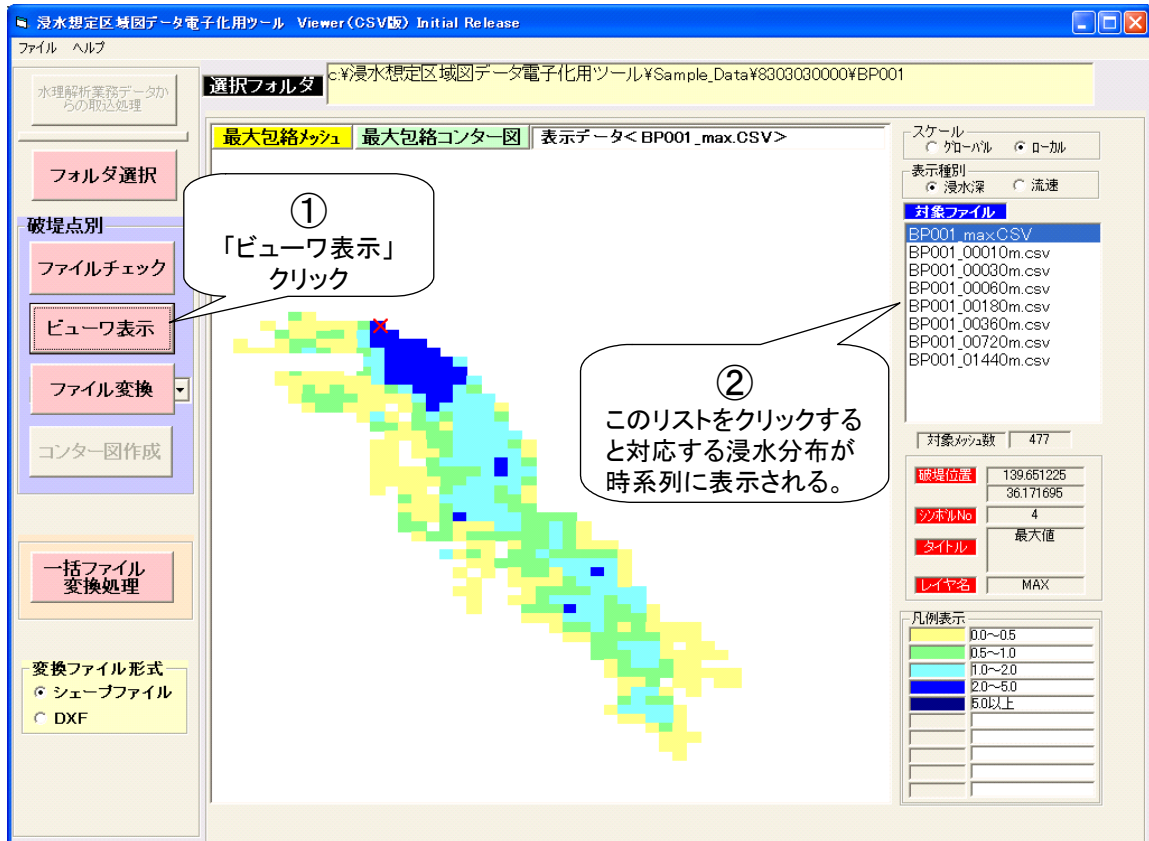


図 22 ビューワ表示の手順

- ① : 「ビューワ表示」 ボタンをクリックすると、CSV データのメッシュ図形が表示される。
- ② : フォルダに格納されている CSV データが表示される。  
画面に表示させたい CSV データを一覧から選択することができる。

## 2.4 最大包絡のコンター作成

最大包絡のコンターデータを、電子化用ツールを用いて自動作成する。作成されるデータは CSV ファイル形式で所定のフォルダに保存される。



図 23 コンター作成の手順

- ① : 「コンター作成」をクリックする。ただし、フォルダ選択時に『MAXALL』フォルダを選択したときのみ、クリックすることができる。
- ② : コンターデータが作成されると、格納場所が保管され、「最大包絡メッシュ」ボタンや、「最大包絡コンター図」ボタンをクリックし、表示させることができる。  
また、最大包絡のデータ変換は CSV コンターデータを変換するため、CSV コンターデータを作成していなければ、シェープファイル、DXF ファイルに変換することができない。

## 2.5 データ変換

ファイルチェック済みの CSV データをシェープファイル、DXF ファイルに変換する。

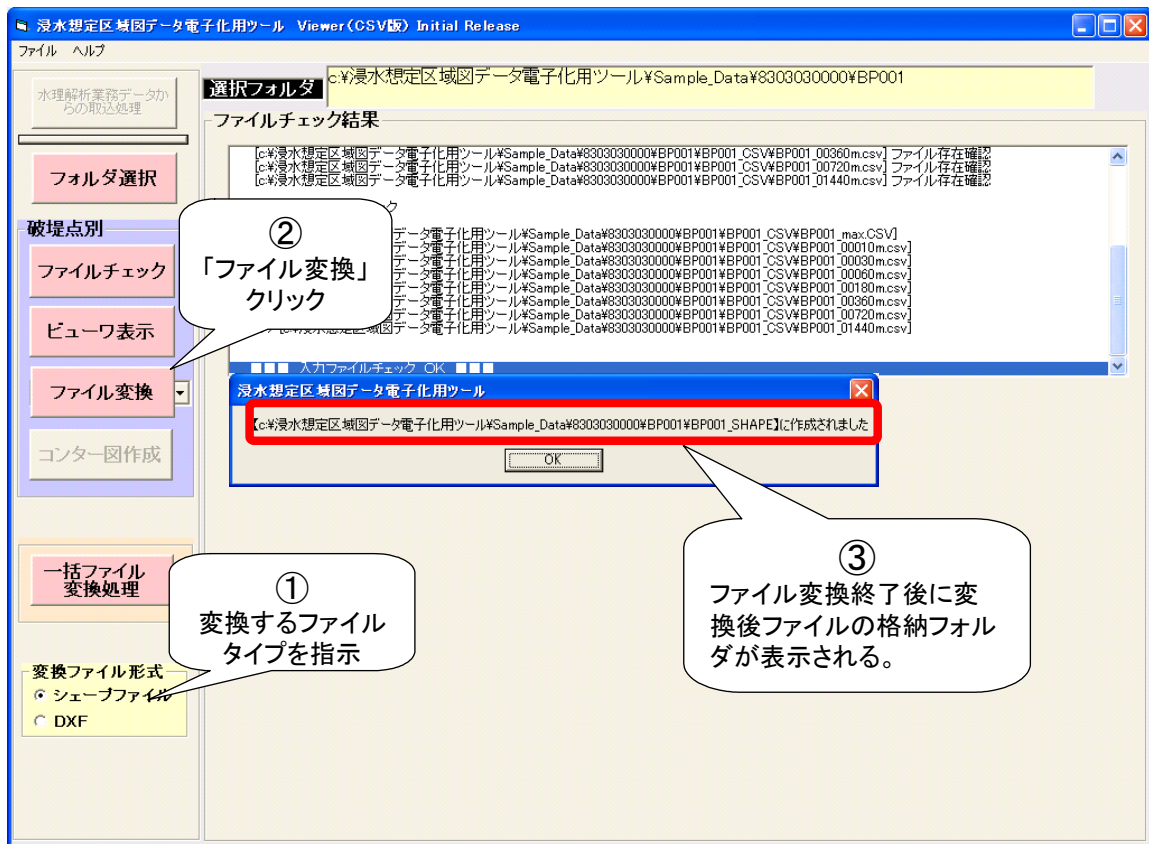


図 24 ファイル変換の手順

- ① : 変換するファイル形式をシェープファイルか DXF ファイルから選択する。
- ② : 「ファイル変換」をクリックし、変換を実行する。
- ③ : ファイル変換が成功すると、ウィンドウがポップアップされ、変換後ファイルの保存先が表示される。

## 2.6 一括データ変換

電子化用ツールでは、破堤点ごとにデータ変換を行うことを基本としているが、大川の場合、多数の破堤点のデータが存在することも考えられるため、全破堤点のデータを一括でデータ変換する機能を持たせている。

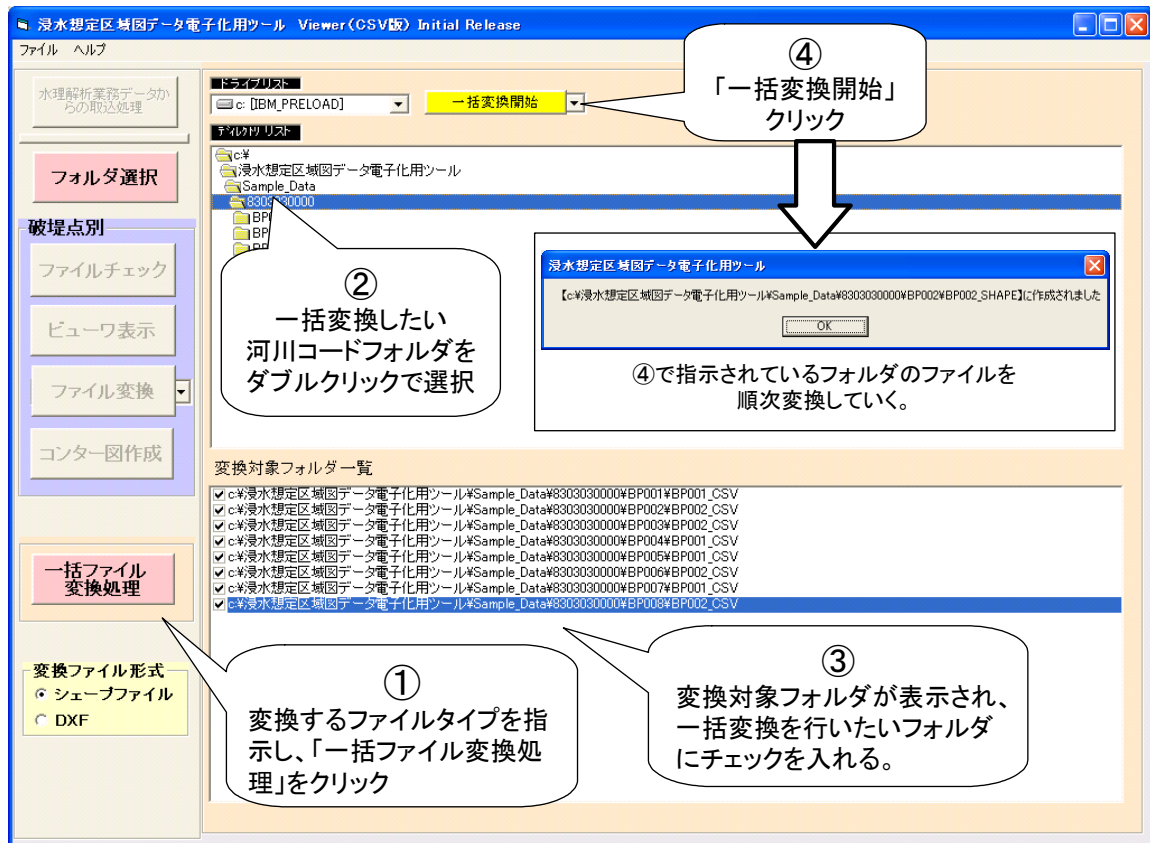


図 25 一括変換の手順

- ① : 変換するファイル形式をシェープファイルか DXF ファイルから選択する。
- ② : 「ファイル変換」をクリックする。
- ③ : 一括変換を行いたい河川の河川コードフォルダを選択する。
- ④ : 一括変換の対象となるフォルダの一覧が表示され、変換を行いたいフォルダにのみチェックを入れる。
- ⑤ : フォルダの選択をすると、「一括変換開始」ボタンが黄色になり、クリックすることができる。

## 用語集

### 1) コマンドボタン

プログラム上で処理を実行させるボタン。

### 2) ラジオボックス

複数の項目のうち、どれか一つだけを選べる機能。

### 3) コンボボックス

操作画面で項目の入力や選択に使われる機能。文字入力のための矩形領域(テキストボックス)と項目選択リスト(リストボックス)を組み合わせたもの。テキストボックスの右端のボタンを押すと選択可能な項目の一覧が表示され、その中からひとつを選ぶことができる。

引用：IT用語辞典 e-Word (<http://e-words.jp/>)